

80年代の小説にみる中国社会の問題点 その六

堀 黎 美

Reflex of Chinese Social Problems on the Contemporary Chinese Literature Part 6

Reimi HORI

“ Chinese people's View on Education 2 ”

The purpose of education in China is to bring up such people as are obedient to their elders and superiors (to say nothing of Communist Party). It never aims at promoting indivisuality, creativity or still less criticizing ability. In such self-righteous and less informed society that does not allow criticism, corruption takes place in stead of progress and improvement.

Consequently, unless the state Leaders clearly recognize that, under such circumstances, although the students and citizens who criticize Communist Party demanding democracy are so much valuable to the advancement of China, many excellent young people may continue to desert their country causing it to drop behind more and more.

中国人の教育観 2

序 論

前回^{註⑩}にも記したように、ここ数年——というより新中国成立以後発表された小説中、教育問題、特に学校教育を取り上げているものは多くない。このこと自体が中国における教育の位置を示していると思うが、特に文化大革命開始後は、知識人や教育者は蔑視の対象で、教育のない者ほど汚れない正しい人間とされていたから、小説中に出てくる知識人、教育者はまともな存在とは見なされないことが多かった。文化大革命が終わり、80年代に入ると、精神汚染反対運動や外国のブルジョワ思想排除運動など、保守派勢力の巻き返しが時どき行われたものの開放政策も徐々に進み、作家も最初はこわごわ、そしてだんだん大胆に、文芸が政治に従属させられていた枠内から抜け出し、社会の暗黒面を直視するようになってきた。したがって、80年代に入ってやっと理想化、パターン化されていない主人公・題材が現れてきたと言えよう。そこに着目して中国の小説を紹介しつつ中国の内蔵している問題のいくつかを取りあげてきたのだが、教育を題材にした作品はまだまだ数が少ない。小論を書くにあたって筆者が読んだ作品総数の2%前後といったところか。それらもほとんどは教師の生活の社会的・経済的はじめさを扱ったものである。

例をあげると、教師の善意と愛情が無知な親子に踏みにじられる王安憶の《人人之間》^{註②}、熱心かつ細心に教育に取り組み、子供も慕っていた先生から引き離し、無理やり重点校に転校させる親の心情を描いた劉心武の《非重点》^{註③}、手製のベッドが一つ置けるだけの一室しか割当てられず、自分のベッドを欲しがっていた娘が病死するまで、親子三人同じベッドで休まねばならなかった中学教師の悲哀を書いた江瀬《紙床》^{註④}、大学受験の苦しさで貧しさのため、脱落せざるを得なかった友人達の話と主人公の苦闘《塔舖》^{註⑤}、中学・高校・大学の受験を控えた三人の子供を持つ家庭の狂奏曲、汪浙成・温小钰の《苦夏》^{註⑥}、教師の昇格をめぐる棒が少ないため激烈な競争が行われ、人間関係まで破綻していく王蒙の《庭院深深》^{註⑦}や、陳世旭の《馬車》^{註⑧}、卒業後の配分をめぐる大学生対大学、学生同士のかけひきから始まる李憲の《大学生変奏曲》^{註⑨}、などが印象に残る。その他小説ではないが、教師のあまりに悲惨な生活を告発した蘇曉康・張敏の《神聖憂思錄》^{註⑩}や、何博伝の《山坳上的中国》^{註⑪}などを読むと、教育環境の劣悪さ、特に初等・中等教育を担当する教師への残酷な待遇に愕然とさせられる。なぜもっと国家が教育を重視し、投資をしないのであろうか。イデオロギー優先の失政が長く続き、国家財政が逼迫していることは理解できるが、要は為政者の何を最重点にしなければならないかの選択の問題である。これまでのところ、当然といえば当然かもしれないが、為政者の望んだ教育とは党の方針に従順な人民に仕立て上げることではなかった。教科書の内容、教育方法にしても、党の良い子で中国の伝統を踏み外さない人間を育成することにある。それはすでに前回《孩子王》^{註⑫}の“私”の失敗でも取りあげたが、今回は大学における教育の一つの典型を取りあげてみたい。

本 論 (一)

“我是侏儒”

李建著 原文約1万字

劉方貴と私がはじめて出会ったのは大学に入学した時。彼は18才、私は22才だった。翌日は入学式。学長の挨拶を皆眠気をこらえて聞き終わると、続いて学部歓迎会があった。まず総支部書記の挨拶。学長の原稿をもう一度聞き苦しい抑揚をつけて読み上げるような、同じ内容の話を熱烈な口調、表情で、そのうえ一句ごとにことばを区切って話すので、聞かされる方はその度にやむなく拍手をしなければならなかった。ついで各主任と教授の紹介。高潔なすぐれた業績の持主にお目にかかれて嬉しいという気持を、例によって拍手で示した。古典文学の一级教授成先生が教師を代表して話した。先生はまず学を修める態度と道理について話し、続いて学生の創作に触れた。「創作は元来とても素晴らしいことである。しかし大学は研究者を養成する場所で、創作は邪道である。大学は学生の基礎を作る段階であり、基礎をしっかりさせれば生涯限りなくプラスになるし、基礎がきちんとしていないと後から補うのも難しく、機会もない」成先生の重々しい話を私達は感心して聞き入った。

散会の時劉方貴に「どう？」と訊ねると、彼は自信に溢れて言った。「中文科に入学したのはつまり創作を勉強するためだ。研究しろだって？フン！」横を数人の教師が通り過ぎがてらジロ

ジロ彼を見つめ、彼のことが耳に入らなかったようなそしらぬ態度で「創作には生活経験が必要だし、学問研究こそが大切なのだ」などと、自己弁護ともつかず、同僚をかばい立てしない後めたさも感じないで済む免罪符のように言った。

その夜は劉方貴と一緒に宿舍内を訪問して回った。ある部屋で数人の学生が一心に書き物をしており、「着くなりもう家に手紙を書いているのか」とひやかすと、思いがけず口々に戻ってきた返事は、小説を、それも中篇ではなく長篇を書いているとのことで、呆れてことばもなかった。

一学期はあっという間に終わり期末テストになった。大学での最初のテストとあって全員目の色を変えていたが、済んでみればどうということもなく、後期になると皆そろそろ授業をサボるようになってきた。一番サボるのが劉方貴で、教室に出てこない時は宿舍で一所懸命書き物をするか、本を読んでいた。時々見せてもらったが、なかなかのものと私には思われた。

後期になると創作の授業も始まった。劉方貴は喜び勇んで毎回小説を提出したが、低い点数しか与えられず意気阻喪して「創作担当教師は石頭で何も分らない」と文句を言った。しかし創作の時間には必ず出席しまじめに励んでいた。ついにある日彼の小説が取り上げられ、教師は「劉君の創作態度はまじめだが、格調が低く頹廢的で自然主義的描写が多すぎる上に、扱っているのが三角関係とは不健康であるのみならず滑稽である」として、皆で口誅筆罰を加えようと意図してある学生に読みあげさせた。小説は一人称で書かれ、愛する女学生が主人公の最も敬愛する教師と恋愛関係になり、主人公の沈痛な、真摯な感情が痛手に堪えきれないのを描いた悲劇で、読み終わった時教室内は長いこと寂として声もなかった。かなりたってから突然半分以上の学生が熱狂的に拍手した。本来の意図に反する拍手に教師は当惑したが、自説を固守し声を涸らして批評を加えた。それはそれで感動的ではあったが、腕を振り回し、故意に大仰なことばを用いての熱弁は、皆を大笑いさせ、無料で滑稽劇を見せてもらったと言いつつ合った。

二年生になるとクラス内にもカップルが生まれ、始まると同時に猖獗をきわめた。サボり始めた時と同じくこの潮流の先頭にいたのが劉方貴で、彼は進撃を開始したが二度にわたって手痛い失敗をしたあとひどく落ちこんで、宿舍にひきこもり一日中詩を書いていた。彼の詩は小説よりも更に人の心を捉えるものがあり、もし発表されたなら必ずや詩壇の詩人の半分は、赤面して筆を折るだろうと思われた。友人達は皆争って彼の詩を写し、一時は学内で最も人気のある読物であった。

ほどなく新年、皆はパーティーを開いて楽しんだ。私が酔って部屋に帰ると、彼がいて酒を飲んでおり、突然ぼろぼろ涙をこぼし大声をあげて泣き出した。「おれの運命はどうしてこんなにつらいんだ。おれは何なのだ？おれは侏儒だ。そうだろう？」「うん」「侏儒はどうやって育てるのか知ってるか？鉄の籠に入れて背が伸びないようにするんだ。おれは成熟した。おれは成熟した侏儒なんだ。おれはもともと何なのだ。当然どうあるべきなのか。おれは成熟している……成熟しているんだ」と言って、ベッドの枕許に並んでいるテキスト類を指さし、大声で「これがおれの鉄籠だ！」と絶叫した。「おれは翼を切り取られた空の鳥、四肢を折られた草原の馬……そのうえ彼女達、人面獸身の女達はおれの心に刃をつき立てる……空よ、草原よ、女達よ……」彼

が声を溜らして叫んでいるのを見るのは耐え難い思いだった。

新年が過ぎると最大の頭痛のたねはテスト。劉方貴は古典文学をしくじった。成先生の授業をずいぶんサボったので、テストを受ける必要はないと申し渡されたと聞くに及んで彼の留年が決定したことを知った。成先生の講義は考証が多く難しく学生には評判が悪い。サボる学生も多く成先生の名目も丸つぶれだったから、きっと劉方貴は見せしめにされたのだ。

留年後の彼はまじめに授業に出席はするようになったが、時折放心したように窓の外に目をやり、急に立ち上がり屋内を動き回ったり詩を書いたりし、また気を取り直し教科書に向った。彼の書く詩はますます深味を増し、もし発表されたならきっと多くの人に感動を与えるだろうと思った。ほどなく私は卒業し、劉方貴はもう1年学校に残ることになり、彼の噂を耳にする機会もなくなった。

ある時出張先で偶然もとのクラスメートに会い、彼のその後の消息を知った。その元同級生は研究生となった劉方貴を大学にたずねた時、詩を書き続けているかと聞いたところ、彼は苦笑して「もう詩は書けなくなってしまった。幸い勉強するのが習慣になったから、将来は教職で食べていく」と言ったそう。

しばらくして私が書店をぶらぶらしていた時肩を叩かれて振り返ると、劉方貴が眼鏡をかけた上品な女性と立っていた。妻だと紹介された。私が詩のことに触れると「あれは若気の至りで」と笑い「近々論文を発表するので送らせていただきますから、ご叱正をお願いします」と言った。私はあわてて彼の口調に合わせて「それはどうもごていねいに痛み入ります」と返事をしたが、30年代の田舎紳士のやりとりみたいでけいれんを起こしそうだった。

まもなく論文が送られてきた。文章も考証もたいへんきちんとしていたが、あたりさわりのない、新しい観点もない平凡なもので、散見する同年輩の俊秀の発表する論文はおろか、以前の荒削りではあっても輝いていた頃の彼の文とも比較するべくもなかった。しかし彼は手紙に、成先生がこの論文を激賞し、彼のドクターコースに招かれ、卒業後は母校の教師になることに決めた謙虚な口ぶりの中にも得意そうに記してあった。

手紙を読み終えた時、私は突然思った。成先生も若い頃には詩才があったのではあるまいかと。

‘79年から’83年まで中国の大学で働いていた経験からこの作品はとても興味深く読み、四校ほど関係した中国の大学の雰囲気を出した。この作品に描かれている成先生は、それなりの信念を持って教壇に立っているのであるけれども、きわめて伝統的な教育観の持主で、彼にとって学生が学ぶということは字義の通り師をまねることであり、教師の力の及ぶ範囲に学生を閉じこめてしまう。劉方貴という荒削りながら未知数の可能性を秘めていた青年が、平凡な人間に作り変えられていく過程で「自分は鉄籠に入れられ、否応なく侏儒に仕立て上げられる」^{註9}と嘆く。その嘆きは、劉方貴という形を借りた中国青年全体の嘆きである。

それにしても中国ではなぜ学生がものを書くことを恐れるのであろうか。筆者の短い経験の範

囲においても、文学好きの学生達が同人雑誌を作ろうとすることさえ、学校につぶされた。ともかく当時は学生が自分の意見を持つことは学校の指導者達に激しく嫌悪された。ガリ板でさえも貸して貰えない。情報伝達的手段には特に神経を尖らせているようであった。

劉方貴はやがて鉄籠に入れられているのを忘れてしまうのと時を同じくして創作が出来なくなる。ということは自分の意見を持たなくなったこと。つまり成先生の教育は成功したのである。そして劉方貴はやがて成先生となり、次なる劉方貴を鉄籠に入れる。これは中国の教育の本質を非常によく描いている。

文を書くことは自分の考えをまとめ、他者に伝えることであり、他者の書いた文を読むことは他者の考えと自分の考えを止揚していくことであろう。その作業を押し進めていくなれば、必らず現体制批判にも結びつく可能性を、中国の為政者は経験上熟知しているのである。文盲が全人口の1/4とも1/3とも言われ、大学卒業生及びそれに準ずる高等教育を受けた者は、全人口比の1%前後と聞く中国において、国家の目指す現代化に絶対必要な人材、大学卒業生は、両刃の劍的存在であり、常に鉄籠に入れて、同じ歌を歌うように教育していかなければならないのである。

劉方貴の恋愛に関するあれこれの部分は割愛したが彼は文章によって政治批判などをしたのではなく、恋愛小説、恋愛詩を書いたのであるが、恋愛も全体対個という関係から見れば、非常に危険な要素に満ちている。国家が全体的なある方向づけを目指す時、個の行為である恋愛は多かれ少なかれ全体に組みこまれるのを拒否する。人は戦争やイデオロギーのために死ぬかもしれないが、同時に愛のためにも死ぬことができる。本能に基づくだけにこれは統制しがたい感情である。したがって個の方向に向いそうな危険は極力避ける必要がある。80年代はじめまで学校側（当時は指導的立場にあるのは全部共産党員で、校長、学長よりも支部書記の権限の方が大きかった）は档案（くわしい身上調査書の如きもので、以前は各機関に保管され一生ついてまわり、しかも本人は見ることはできなかった）や、卒業後の職業の配分を一手に握っていて、それが学生を拘束する大きな圧力になっていたし、大学生は全員原則として寄宿舎生活をし、そこには補導教員という思想上生活上のお目付役がいて、完全に管理されていたのである。当然、学生側はその仕組を歓迎するわけがない。80年代後半に入り、経済の開放政策が進み、外国からの情報を防ぎきれなくなり、価値観の多様化が少しずつ浸透していく。文化大革命を経て鎖国を解かざるを得なくなったあと、それまで信じていた価値観の崩壊を目のあたりにした世代後に育ってきた青年達は、少なくとも外国との比較という複眼で中国を見るようになった世代で、中華思想にこり固まっている人達とは当然考え方が違ってきている。もう成先生がどんなに鉄籠に入れようとしたところで、時代は激しく変化していくのではなかろうか。

(二)

つぎに紹介するのは、ダブルスタンダードに生きなければならない学生、教師、学校、社会のかけひきを扱った作品

李曉著 原文約1万8千字

四眼と黄魚ことぼく李〇〇は大学の同級生、親友で4年間ルームメイトでもあった。卒業後は新聞社に就職し、彼は大学院に進み理論教研組の王教授の門下生になった。王教授にはとても可愛がられているらしく婿になるという噂も耳にした。ある日その四眼がぼくのところにやってきて「王教授に業績を横取りされた」と言う。半年の心血をそそいだ論文で中国古典文学研究上の一大発見になる自信作を、王教授を通して権威ある雑誌にのせて貰うことにしたが発表された結果、著者は王教授になっていて自分の名は全然なかった由。ぼくは気の毒に思って「我々の友情のしるしに何とか記事にして仇を討ってやる」と言った。その話をすると馬部長はくわしく調査のうえすぐに記事にするよう命じた。ぼくは早速久しぶりに母校に赴き校内を歩いていると目指す相手が現れた。中文科の放送局と呼ばれている侯先生である。ぼくが記事を書くため調査に来ていることをほのめかすと、先生はしきりに聞きたがったので、他言しないで下さいと言ってくわしく話した。これだけの手を打てば聞きたい情報は先方からやってくる。四眼がかって「ここ中文科は劉、柳2教授を源とする王・李対張・趙の二派に別れて激しく角突き合っている。学校が学生のものだなんて完全に思い違いだ。学校から見れば学生なんて通過する客に過ぎず、学校は教師のもの、それも主流派の教師こそが本当の主人公なのさ」と言っていたことがあるが、翌日からぼくが目論見通り二老教授と4人の後継者を除く中文科の全教師が押しかけてきた。そのうちのある教師に劉・柳2教授の確執の原因を教えてもらった。実に些細な解釈で意見が対立し、争いになったそうで実際ばかばかしいと思った。王教授は事が明るみに出て、主任教授に内定していたのがだめになり家に引きこもったまま、中文科は上を下への大騒動になっているらしい。ならば反対派の張、趙教授が色めき立っているかということ、それぞれ脛に傷を持っているらしく事はそう簡単には運ばないのだそう。

そのあと四眼もやってきて「お前は何てことをしてくれるんだ。噂が全校に拡がって、おれは指導教官を売ったと後ろ指をさされ、学内を逃げ回ってるんだぞ。このままでは出家するほかない」とまっかになって怒った。ぼくは笑いをこらえ、計画は着々と進んでいるから安心しろと言ひ、四眼は来週論文発表会が開かれるまでに何とかしてくれないと、ひどい立場に立たされるのだから、しっかり手伝ってくれ、以前お前をずいぶん助けてやったんだから、と言ひ残して帰って行った。

大騒ぎが急に静まった。騒ぎのあとに雷が鳴り渡るはずなのに変だと思ったが、檄文は完成した。案の定大学から新しく当選した李主任教授が話したいとの電話があり、新しいトヨタを迎えによこした。かつてぼくも教えを受けた李教授は、精神的強者であることを無形の圧力で示しながら「貴社はさる教授の件を記事にするそうで私はとても恥かしく思っている。会議の席上でもこういうことは絶対あってはならないと皆に言った。問題提起をしてくれた貴社には感謝しているし、記事にすることを妨害はできない。しかしこんな時に主任を押しつけられてとても困っている。そこで君にお願いしたいが、局面を打開するまでもう少し時間をくれまいか。君の母校でもあるのだし。ところで、馬部長は西南聯合大の出身だったね。馬部長には彼と同級だった朱

教授を通して私の気持はすでにお伝えした」と言い、ぼくと四眼は負けたのを知った。帰社すると馬部長がこの件はボツにすると行った。

四眼の論文発表会は満員で、審査員席には王教授を除く主だった教授が全員顔を揃えており、両派から叩きに叩かれて四眼は善戦の甲斐なく敗退した。彼が人の論文を盗んだのではないのに叩かれている四眼が哀れで、この時突然ぼくはずっと四眼にある種の恨みを抱いていたことに気づいた。だが今その恨みは消失し、心の底から四眼の力になろうと四眼の後を追った。「くたばれ黄魚！おれに恥をかかせて！何もかもお前と李畜生のおかげだ」「李教授がどうした」「王教授は主任になりたかった。そのために業績が必要で、交換におれの出国を保証してくれた。李じじいに酔わされて、唆かされたからお前のところに行ったんだ。すべて李じじいの筋書きさ、李という奴はどいつもこいつもひどい奴らだ」そういう次第だったのか。四眼もぼくもまだだめだな。これからも手を取り合って訓練を続けていくほかないな。ぼくはしみじみそう思った。

もしも日本人に「無条件で制限なくどこへでも行けるとしたら、あなたはどこの国に住みたいか」と質問したらどのような答が返るだろうか。多分「外国で暮したい」という人よりも、「日本にいる」と答える人の方が多いのではあるまいか。同じ質問を何人かの中国人にしてみたことがある。得た答は「誰も中国には残らないだろう」というものであった。誰一人もというのは誇張にしても、現在多くの中国人の望んでいることは「中国を出たい。しかし自分達はもう無理だろうからせめて子供は外国に出したい」というものであろう。そのために人々は各自で出来るあらゆる努力をする。外国人とのコネを作るだけでなく、出国許可を左右する上司や要路にある人に、それなりの事をしなければならぬ。まず資金が必要であるからお金を得る手段を必死に追求する。拝金主義が全土を覆っている。それは感心しがたいが理解はする。耐えがたいのは足のひっぱり合いや密告である。自費留学はともかく公費派遣や外国の奨学金つき留学は、その人選をめぐって激しいかけひきや争いが展開されることが多い。つい最近まで人権やプライバシーを口にするのは、ブルジョア思想に毒されたものとされていて、端的に言えば、中国は人民の国家であるからして人民に損失を与える者を密告するのは人民としての義務である。彼が出国すると自分は行けなくなる。自分は人民である。従って人民に損害を与える彼は人民の敵である。といったばかげた論理さえまかり通っていたくらいであるから密告は多かった。最近でも'89年の天安門事件のあと、政府が人民に密告を奨励したのも記憶に新しい。ただし天安門事件のあと、政府の呼びかけを無視し、妨害する行動さえもあった由で、この点でも中国社会の変化が見てとれる。

常に思う。個々の中国人は本当に暖かく誠実な人が多い。日本人が失ってしまったとされる良い要素を沢山持っている。文句を言いながらも中国に魅きつけられている原因は、遺跡や文物、風景もさることながら、やはり中国人の信義にみちた暖かさである。そしてどうも中国人の長所と思われるものは伝統的に中国人が持っていたものであって、革命後に新しい道徳として備わったのではないらしいことである。革命後、新中国となってからの成果は対外的・対内的にさまざ

まにあることだろうが、人間の品性や徳性を高めるにはどれだけの成果があったのであろうかと。

ところで継続操練であるが、王教授も中国人教師の一典型である。論文の剽窃や門下生の業績の横取りは日本でも新聞種になったりする。それは個々人の品性の問題であるけれども、王教授の場合には中国の特殊事情もからんでくる。王教授がいかなる経歴の持主か小説からは分かりかねるけれども、推測するに30代末から50代はじめにかけて文化大革命に遭遇し、世の中にブルジョア学問という害毒を流した臭老九（9番目の悪者）として紅衛兵に鞭打たれたり、労働改造に追いやられて豚以下の扱いを受けたであろう世代と思われる。学者だけに限らないが、体力、気力、知力の充実している年代に、業績を生むどころか読書さえ許されず、文化大革命終熄後名誉回復され大学に復帰したものの、公務や雑事に追いまくられ思うように論文を残せなかった。それが気がつくといつの間にか世の中が変化し、大学も業績第一となり、定年制も導入された。学科主任になれば住宅から給与、将来の年金まで違ってくる。場合によっては定年さえ延長されるかもしれない。科には同年輩の競争相手が多勢いてなんとか抜き出なければならぬし、ぐずぐずしていれば定年でチャンスを失する。

一方、四眼の方は気鋭の研究生として自信に満ちて論文を書き上げる。その論文は学界にかなりの反響をもたらすものになりそう。そこで権威ある専門誌に推して貰おうと王教授のもとに原稿を持ち込んだところ、王教授と密約を結ぶ破目になる。相談を持ちかけたのは王教授であろう。その時四眼はきっこう思案したのである。王教授の提案を拒否すれば、今後学内での自分の立場がかなり苦しいものになる上に、専門誌に論文を発表する件も握りつぶされる可能性が大きい。ならば論文を教授に譲り、教授の学科主任就任の手助けをした方がよい。中国国内にとどまっているより外国に行った方が研究条件もずっとよくなるし、外国で得た学位があれば将来再び大学に戻ったとしてもずっと有利だ。出国許可の権限は主任教授にある。この際王教授に賭けよう。

計画はうまくいくはずであったのに、王教授よりも一枚うわ手だったのが同じ派閥の李教授。四眼を酔わせて計画を聞き出し、罠をしかけて漁夫の利を占めてしまう。

四眼は優等生、ぼくこと黄魚は出来の悪い学生だが親友同士。李教授の陰謀に二人ともひっかかり、四眼は貧乏くじを引く。真相を知らない他の教師達も意地が悪い。四眼が恩師を売ったと見なして団結して四眼をいじめる。公衆の前で恥をかけた四眼の姿を目にした時、黄魚ははじめてずっと抱いていた四眼に対する自分のみにくい嫉妬心に気づく。自分で自分の嫉妬心に気づくというのが、この作品の大切なポイントであると思う。（多くの人間は自分をそのように冷静に反省しない。）そしてまだまだ訓練を続けていかなければと決心する。

未熟な人間がそれに気づき、修養を積むために訓練を続けようとしたのであればすばらしいが、訓練の目的が人をおとし入れる罠にはまらず、かしこく世渡りして成功者になる方法を身につけるためであるならば佗しい。作品からはどちらを意味するのか分かりかねるし、日本以上に複雑な中国社会で成功者を目指すならば、李教授式に事を運ぶ訓練を積み重ねなければならないのかもしれないが。

結 論

中国の抱えている諸問題は、つまるところ貧困、根強い封建意識、相互不信と教育の軽視に起因する。というのが80年代に発表された小説を多数読んだ結論である。それらはたがいにからみ合い悪循環している。貧困は迷信を生みかつはびこらせ、人を狭い思考範囲に閉じ込め、価値観の多様性を認めず、それゆえに社会の発展を阻害し、個人の人間性を疎外し、それはまた貧困からの脱却を困難にするし、当然教育への投資も後回しにされる。特に初等・中等教育において1クラスの人数の多さや教材不足などの悪条件、そして伝統的に官位や財物よりも知の位置が低く、教師は時には蔑視の対象でしかない環境下では、人材育成を仕事とする職業は外国に行ける機会も少ないし、すぐに目に見える形で利益が現れてこないから、全く不人気でなり手が少ない。待遇も悪い。よしんばすぐれた素質を持つ教師であったとしても、さまざまな壁と日常生活の重圧にはばまれて能力を存分に発揮できず、次第にやる気を失う。もともと勤勉で忍耐力に富み、かしこい中国人は出国して華僑になると、世界各地においてかなりの確率で成功しているのである。その能力を母国ではなぜ発揮できないのか。劉心武が《班主任》^{註34}の張先生に言わせているように“世界の民族の林の中に屹立する中国民族”^{註35}を望むのであれば、もっともっと国は教育に投資し、人々は自らの心を解放していく必要があるのではなかろうか。私事ながら中国が第二の母国である以上、中国を離れることができない者として、ある民族が他の民族の中で屹立する必要はないと思うが、中国の人達が平等に、幸せに暮せる国、真に愛せる国になることを切望しているのである。

後 記

80年代と区切って中国社会の抱えている問題をさぐろうとしたのは、すでに述べたように80年代に入って中国に新風が吹きはじめ、作家達もそれまでの文芸は政治に奉仕し、社会の暗黒面を描いてはならないというタブーに挑戦し、文芸世界を広げていった結果小説が面白くなって来はじめ、これまで描かれなかったテーマが取り上げられ、作品が等身大の中国社会を写し出していると感じたからである。であるから当初は'91年版の作品を読むまで続けるつもりでいた。ところが'89年の天安門事件のあと引きしめがきびしくなり、事件後は何も発表しなくなった作家もいるし、発表している作家も足をすくわれない題材を選ぶ傾向である。毎年出版されていた中篇、短篇作品集なども、'90年、'91年のものはまだ見ていない。開放の80年代は、文芸界においては実質的に'89年前半で終わってしまったものとする。文芸界の開放は時間につれ更に進むものと期待していたから、80年代の問題が90年代にはどう変化していくか、90年代にはまたどのような問題が出てくると対比したいと考えていたのだが、それにはもうしばらく時間が必要のようである。書き切れなかった問題は個々に取りあげることにして、今回で一応小論を終える。中国の文芸、社会環境を紹介するために偶然選んだ小論の題名であるが、今にして思うと中国の80年代('79年あたりから'89年まで)は、将来文芸的には截然と区切られた年代になるのかもしれない。

引用作品

“我是侏儒”	李建著	1986年短篇小说選	人民文学出版社	1988年2月第1版
継続操練	李曉著	1986年短篇小说選	人民文学出版社	1988年2月第1版

- 註① 1991年福井工業大学研究紀要第21号（第二部）P87. 80年代の小説にみる中国社会の問題点 その五
- ② 1984年中国小説年鑑 短篇小说卷 中国新聞出版社 1985年9月第1版
 - ③ 日程緊迫 群衆出版社 1985年6月第1版
 - ④ 1988年中篇小説選（一） 人民文学出版社 1989年12月第1版
 - ⑤ 1987年短篇小说選 人民文学出版社 1989年2月第1版
 - ⑥ 1981-1982 全国獲獎中篇小説集（下） 上海文芸出版社 1983年11月第1版
 - ⑦ 1987年短篇小说選 人民文学出版社 1989年12月第1版
 - ⑧ 1987年短篇小说選 人民文学出版社 1989年12月第1版
 - ⑨ 北京長篇小説創作叢書 北京十月文芸出版社 1988年6月第1版
 - ⑩ 雜誌人民文学 人民文学出版社 1987年9月第336期
 - ⑪ 問題，困境，痛苦的選択 貴州人民出版社 1989年6月第2版
 - ⑫ 棋王 作家出版社 1985年11月第1版
 - ⑬ 1986年短篇小说選 人民文学出版社 1988年2月第1版 P.609
 - ⑭ 1978年全国優秀短篇小说評選作品集 人民文学出版社 1980年 第1版
 - ⑮ 同上 P.20

（平成3年10月28日受理）